



現代俳句時代

第3回 本質論の成立していく時代 — 森澄雄の視点を通して

中岡毅雄 Nakaka Takeo

↑1. 長谷川權・森澄雄往復書簡について

一年ほど前になるが、「読売新聞」紙上で、長谷川權と森澄雄の往復書簡が、四日連続で掲載された。

平成十五年三月三十一日夕刊で、長谷川權は、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を取り上げ、上五「や」には明確な切れがあるため、「古池」と蛙が飛び込んだ「水」とは別次元であると解釈。「古池」は芭蕉の心の中に存在すると考えることにより、この句は平板な叙述ではなく、大きな宇宙となり読者を包み込むと主張した。

それに対し、森澄雄は、四月一日夕刊にて、この句は深川の芭蕉庵で詠まれたものであるため、確かに、古池は黙視のイメージの中で自ずから浮かんだものであると、長谷川の意見を一応支持しつつも、「切れ字」の俳句的思考より、「言葉の奏でる音楽の空間の広やかさ大きさに耳を傾けるべきだと反論。更に、句集「虚空」の帯に、長谷川が書

いた「天体も生命も虚空に遊ぶ塵」という悟ったような「賢しら」は捨てるべきだとも述べた。

四月二日夕刊で、長谷川は「天体も生命も虚空に遊ぶ塵」の「塵」は宇宙に遍在するもののことであり、決して、「賢しら」などではなく、古池の句について書いたことも、失われた芭蕉の真意の探求であると抗弁。芭蕉の句で重大な働きをしているのは、日ではなく耳であり、「閑さや岩にしみ入る蟬の声」(京にても京なつかしやほととぎす)の句にも、そのことは表れていると自説を展開した。

ところが、その長谷川の鑑賞に対しても、四月三日夕刊での、森の答えはすげない。自説の戦争体験を延々と書いた挙げ句、「貴君も小さな理屈を捨てることが、俳句が大きな世界を得るための一番大事なこと」と戒め、句集「虚空」の「人の世の見るべきは見つ籠枕」は一番嫌いな句であり、どこかに言葉の傲りがあると切り捨てた。

細やかなレトリック分析を通し、芭蕉の作品に新たな

「読み」を行おうとする長谷川に対し、そのような小知を捨て、直接、本質論に参入すべきだという森の主張は平行線をたどり、結局、すれ違いのまま、幕を閉じることになる。

↑2. 「俳句」鼎談を振り返る

この両者の往復書簡を読みながら、思いつくことがあった。

今から十年以上前。平成二年、森澄雄は、『俳句』誌上で、後藤比奈夫・上田五千石とともに、一年間、作品月評の鼎談を行ったが、五月号で、当時、評価が高まりつつあった若手の作品を、痛烈に批判した。

岸本(尚毅)君にしても田中裕明君にしても、なんか老けてる感じだね。若いっていう感じがしないのね。我々の四十代なんてまだ若くてね、いわば四十代でも青春俳句みたいな気分があったでしょう、草田男にしても波郷にしても。そういう新鮮さがどうして今のもっと若い人にならんかね。

今の若手は、確かに句はうまい。しかし、句のうまさなどと言ったものは、大したことではない。草田男・波郷・楸邨の若い頃の句にあった若さがなく、こじんまりとまとまっていて、人生を詠うような志がない。たとえば、岸本

の「猫よりも朴の落葉の大きくて」のような面白さを、この若さでやっていいのか。若い者はなぜ哲学を持たないのか。俳句はちかちかとうまくなつてはいけない。今は、技術を独立してあるものと考えろ。しかし、工夫というものは一句一句にあつて、自分の人生の苦労と俳句の一句一句の工夫は同じものである。単なる技術だけが、俳句にあるはずはない。初めから技術があるように教えるのは間違っている。とにかく、今の俳壇は若い者を持ち上げすぎる。技術の問題ではなく、もっと本来的本質的な意味で、若手を鍛えなければならない。

自分の生きる困難さから俳句が生まれればいいじゃないですか。俳句のテーマというよりも、まず生きるテーマがあつて、そこから俳句のテーマが生まれるんでね。人生に独立して俳句だけのテーマはあるはずがない。

具体的な名前を挙げていないが、この一連の発言は、岸本と田中の師である波多野爽波批判にもなっている。「技術を独立したものとして考え」「初めから技術を教える」指導法とは、「多作多捨」を基本とした、爽波の「俳句スポーツ説」のことである。

樹氷

主宰 小原啄葉

新鮮な発想と個性の開化（昭和五十二年創刊）

誌代（送共）
1年 6,000円

樹氷発行所

〒028-7302
岩手県岩手郡松尾村寄木
1-618-59 円子方
振替・02370-6-4700

13 森澄雄の俳句観を検証する

今の連中は、波多野爽波と同じように、写生一本で多作多捨、多く作って多く捨てることを言うけれども、捨てる俳句は作品じゃない。だから捨てるんだ。捨てる俳句を作ったらだめ。小説家は、たくさん作ってたくさん捨てるなんて言わんですよ。（俳句のゆたかさ）

ここでは、はっきり、名指しで爽波を批判しているが、以下、森の十冊あまりの俳論・俳話集を通読したポイントを、整理要約してみたい。

多く捨てれば、まぐれでいい句ができるだろうと考えているのかも知れないが、俳句を甘く見ている証拠である。

俳人は、客観写生について、ものをよく見て、そのまま詠えというが、一番貧しい考えである（俳句に学ぶ）。人間

が、他のものを客観的に見るなどという傲慢なことでは、俳句は詠めないと思う。もっと、身に沁みこめるもの、向こうから聞こえてくるものを大きく包み込まなければならぬ（澄雄俳話百題）下。

今の俳人は、「虚」を失ってしまった。あるのは、「自我」であり、「個性の信奉」であり、「理屈」である（俳句に学ぶ）。子規以降の写生、人間探求派のやり方は、自分の思いを、無理やり俳句で逐げようとしている。相手をねじ伏せ、やつつけようとしている（澄雄俳話五十題）。なるほど、現代俳句はいろんな技巧は進んでいる。俳句も鋭くなっている。けれども、波長がいかに短い。芭蕉の心の中には、もっと広い時間と空間があったはずである（澄雄俳話百題）上。芭蕉の句は、一対象を詠っていて、単なる風景、一場面の俳句ではなく、人生全体へのトータルな感慨が感じられるのである（俳句 この豊かな

るもの）。

子規の近代は、芭蕉がもっていた無常も造化も切り捨ててしまった。その結果、現代俳句は、木だにそれに代わる大きな思想も哲学も持ち得ていない。そのような中、唯一つ、思想なり得ているのは、虚子の花鳥風詠ではなからうか（俳句のいのち）。虚子は、決して、「写生」を波長の短さに重ねていない。もっと、大きなところで句を詠み、その根幹に「写生」を置いている（澄雄俳話百題）上。

ぼくは、いつも自分より「向こう」のほうが大きいのだと考えている。普遍的な「いのち」の流れという大きな大きなものをつかんで、初めて、自分が認識できる。一人の凡人が切実に生きて、そして、その「凡」を才能にしたようないのちのつかみかたはないかということを考える。しかも、それを、「この世のならひ」の中でつかんでいく（俳句のいのち）。

人間にとって、かなしいことは数限りなくある。それを突き抜けることにより、桃の花が美しく見えるし、竹の音が美しく聞こえるのではないか。そういう温かいところまで行きたい。そうすれば、世の中にあるものが全部おもしろくなる（澄雄俳話百題）上。病気をしてみると、自分が死んでもこうして立派に桜が毎年毎年咲くということ、めでたいことではないかという思いがする。かなしい気持ちではなく、むしろ、うれしい気持ちで眺められた（澄雄俳話五十題）。

究極は、俳句はめでたいものだという感慨のほうが、だんだん強くなってきた。「めでたさ」というのは、単にめでたいという意味ではない。人間のかなしみ、よろこび一切合財を含めて、究極、めでたいものだという考え方である（俳句 この豊かなるもの）。

月刊

春耕

主宰 皆川盤水

新入会員歓迎

誌代（送料共）
半年 6,000円
一年 12,000円

春耕俳句会

〒165 東京都中野区
-0011 中央2-49-15
電話03(3361)1798
振替00110 7 139181

平明な表現、深い句意

師系 皆川白陀 青木重行

月刊 末黒野

主 宰 甘田正翠

誌代(送共)

半 年 5,000円
一 年 10,000円

見本誌 500円(切手可)

末黒野発行所

〒221-0001
横浜市神奈川区西寺尾
1 30 51 菅野昭蔵方
電話・FAX 045-421-2669
振替 00220 2-11136

― 4. 森の人生体験と長谷川の俳句観 ―

プラスの経験のみならず、マイナスの経験も、自分の「いのち」の証として受け入れ、森羅万象の変化に対し、ゆとりのある慈愛の眼差しを向けようとする「めでたさの哲学」。人間味あふれる「いのち」の温もりの感触と、瞬間が永劫に通い合う澄明な寂寥感。

森が、その人生観に到達するためには、非常に過酷な体験を経なければならなかった。

昭和十九年二十五歳の時、出兵。二十一隻の船団で出発したが、バシー海峡で毎晩轟沈され、マニラに到着したのは、わずか三隻。昭和二十年、死屍累々のホルネオのジャングルを、二百日歩く「死の行軍」。途中、ジャングルの中で、飯盒の中蓋をなくした兵隊がいた。陛下の御下賜品をなくすとは何事だ、探してこいと命じられた。行き詰ま

った兵隊は自殺。結局、二百人の中隊で、生きて戻れたのは八人。戦争が終わって帰還すると、故郷の長崎は原爆で壊滅状態。昭和二十三年、結婚してまもなく腎臓を病み、一年半、入院を繰り返す。昭和五十七年、脳梗塞で三年、家居安静。平成三年、大腸癌。その後、脊椎管狭窄症で歩行困難。平成七年、脳溢血で左半身不随。

死ぬ病 得て安心や草の花

やすらかやどの花となく草の花

澄雄

澄雄

森澄雄の安らかな諦観の境地は、彼自身が体験した死の恐怖と肉体の痛みを代償にして得たものであった。

「見るべきものは見つ」の思いは二十代の多くの戦友を喪った戦争の時に既にあった。年長の者からじくなくてゆくのは、大きな意味ではいのちの自然です。

順縁はこの世のならい。往復書簡(四月三日)で、長谷川に対し、そのように答える森は、貴君はまだ見るべきものは見ていないという思いを禁じ得なかったのだろう。

俳句を通して世界を見るうち、失われたものを嘆かず、モノにこだわらないという心のあり方、ダイナミックな宇宙という大きな視野に行き着きました。

これは、長谷川の「読売文学賞」受賞インタビュー(「読売新聞」平成十五年二月七日夕刊)である。内容自体は、先ほど要約した森の俳句観と極めて似通っている。両者の違いは、何なのだろうか。それは、弱者の視点に立つことにより、いのちの奥底に響いてくる「切なさ」の有無のように感じる。

森と長谷川の溝が埋まることはないだろう。掘って立つ人生の基盤が異なっているのだから、お互いに歩み寄りとは難しいように思う。

― 5. 表現のハンディを負った時代 ―

表現活動とは、不思議な営みである。あらゆるマイナス体験を、プラスのエネルギ―に転換することができる。表現者の悩みが深く、苦しみが大きいほど、表現の神様は微笑みかけてくれる。自己の精神と肉体が引き裂かれるような

篠

すず

主宰 岡田史乃

初心者 歓迎

伝統に新しい光を!

年間誌代 6000円

見本誌 無料

すず 篠の会発行所

〒107-0052 港区赤坂
6-9-4-301

振替00220-3-27706

俳句現代派
写俳十書俳十音俳

青玄

主幹 伊丹三樹彦

発行所 伊丹三樹彦
編集室 伊丹 公子

§ 俳句を人間採集の
詩と心得る
§ 写俳書に 一貫させ
たきは詩そして美

誌代(送料とも)
6ヶ月 6,000円
入会金 2,000円
見本誌 500円

青玄俳句会

〒661 尼崎市南塚田町2-7-8
0012 TEL. 06 (6429) 3820
振替 00950-8-29882

体験をすれば、否定なしに、自他のいのちのありように対し、思念を深めざるを得なくなる。不謹慎を承知の上でいえば、実人生でマイナス要因が多く、若年にして「生きる困難さ」を体験することは、表現活動において、有利に働く場合が多いのである。

平成三年一月号『俳壇』で、片山山美子は「俳句の明日を信じて」という一文を寄せている。

俳句が語るべき言葉をもっているというだけで、人生観を語るのが当然であると決めつけてしまふのはどこかおかしい。美術や音楽のように、美意識や感情を感覚に直接うったえる俳句があつてもよいのではないだろうか。

私も、俳句で「人生哲学」を語る必要はないと思つ、し

かしながら、俳句も表現活動である以上、個々の俳人が、確固とした「表現哲学」を持していることは必要であらう。森澄雄は、昭和三十八年、父の最期を看取るため、三ヶ月休職。その後、人間の「生死」について思い悩み、ひたすら、古典を読み耽った。二十代の戦争体験と闘病体験は、森の内面で醸成され、父の死を契機に、自他の「いのち」への洞察を深めるエネルギーとなった。四十代五十代は、自分の人生を深く耕し、「本質」を追究していく時期なのである。

しかるに、今日、こと、俳句の世界においては、本質的な部分を深めていくのが難しい状況にある。時代の豊かさ、俳句メディアの発達など、さまざまな要素が、俳人に対し、「本質論」以外のところに目を向けるように仕向けてくる。満ち足りていることが、逆に、ハンディとなる。パラドックスが成立しているのが、今の時代であるように思う。

青邨・草田男・沐石師の精神を継承

月刊俳誌

小鹿

おじか

主 宰 杓谷多見夫
副主 宰 浜田蛙城

誌代(送料共)

見本誌 五〇〇円
半年六、〇〇〇円

小鹿発行所

〒425-0103

静岡市丸子三十七-二七(吹井方)
振替0081-0131-155932

いのちの哀歓を詠う励ましの集団

月刊俳誌

川

主 宰 松山足羽

いのちの哀歓を詠う……いたわりと励ましの集団
☆新会員募集!
雑誌出句/五句
誌代(送料共) 半年六、〇〇〇円/一年一、二、〇〇〇円
見本誌、〇、〇〇〇円(切手可)

川発行所

〒100-0005 東京都千代田区神田佐久間町
三二七 大栄ビル二階
電話03-3866-7507/振替0019-0153-540011

有季定型 芳醇な抒情を愛す。

圓

創刊 稲垣法城子
主 宰 石河 義介

雑詠七句 義介選
毎月 二十日締切

半年 四八〇〇円(送料共)
一年 九六〇〇円(送料共)
見本誌 五〇〇円

〒407 愛知県碧南市浅間町4-77-6
〇八六六

初心者歓迎

振替 〇〇八七〇・八・四四二一〇
電話(〇五六六)四二一五七五六

圓 発行所

虚子の花鳥諷詠を基礎に、品格と伝統を守る俳誌

月刊俳誌

河内野

個性と情操を豊かにし、
常に新鮮な詩情をたかめ
人生を楽しくする俳句。

主宰山下美典が通信添削指導。初心者には別に
無料添削指導あり。見本誌贈呈、はがきで御請
求下さい。 誌代半年六〇〇〇円(送料共)

〒581-0001

八尾市東本町三十一-11

河内野発行所